# 歯周炎薬物治療 新たな考え発表

## 学会誌に大島奥羽大教授

日本薬理学雑誌６月号に
総説を執筆した大島教授

奥羽大薬学部生化学分野の大島光宏教授は10日発行の日本薬理学雑誌（6月号）掲載の総説で、新しい歯周炎の考え方を発表した。総説は大島教授が同学会からの依頼を受けて執筆した。

同雑誌は1925（大正14）年創刊。1941（昭和16）年からは日本薬理学会の機関誌となった医歯薬学者らにとって権威ある雑誌で、同雑誌の総説を執筆できることは大変栄誉なこととされる。大島教授は「総説の依頼は誠に光栄。今後の研究の励みにしたい」と話している。

総説のタイトルは「歯周炎薬物治療のパラダイムシフト」（7ページ）。これまでの細菌の除去を中心とした治療法に対し、歯周炎（歯槽膿漏（のうろう））は創傷治癒（傷を治そうとする）反応であると捉え、新しい見方、考え方を提唱している。

大島教授は、歯周炎の原因細胞として、歯と骨をつなぐコラーゲンを分解する線維芽細胞を3年前に突き止め、さらに最近、歯周炎原因候補遺伝子の一つを発見。今回の総説は、これまでの長年にわたる研究成果の総まとめと、今後の歯周炎治療の進むべき方向などを最新の知見も交えて分かりやすく解説した。

大島教授は線維芽細胞が発生しないような予防薬、治療薬を開発することを究極の目標に掲げ、国内外の大学や研究所と現在も共同研究を続けており、「人々が一日も早く歯周炎で歯を失う恐怖から逃れられることを夢見ている」と話している。